メカねこと空気入れ

針とら

私の右前脚はロケットランチャーになっている。肉球や付属のリモコンスイッチを押すことで、破壊力抜群の小型ミサイルを発射することができる。

左前脚にはバネ仕掛けのパンチンググローブが内蔵されている。これまたスイッチを押すことで、失神確定の超速パンチを繰り出すことができる。

こんなことのできる私であるが、大輝殿の求めているものだけは、決して渡してあげることができない。

私は猫である。さびしがりやな大輝殿の慰め役として、この家にやってきた。初めて来たのは、北風の吹き抜ける放電しやすい冬の日のことだった。小学五年生の大輝殿は、いつも通りのT字型の空気入れを右手に握り締め、寒さに耳たぶを真っ赤にしながら、玄関前の門に立っていた。私を乗せた車が家の前に止まるのをわくわくと待ち受け、閉じたケージの蓋をぱかりと開いて、私の顔をまじまじと見るまで、大輝殿の頬は紅潮していた。

それから、小さな肩を落として、がっかりと吐息をついた。

（ぼくは猫が欲しかったんだよ）

（猫だよ）ペットショップのおじさんは、にっこり笑ってそう答えた。（メカ猫だ）

（メカじゃない猫が欲しかったんだよ）

（そう言うなよ。ほら、すごいんだぞ）

おじさんはコントローラを操作して、私の右脚を前に出させた。ぽちりと赤いボタンが押されると、私の右脚はぽかりと外れ、ロケットミサイルが飛び出して、向かい家の二階の角部屋が粉々に吹っ飛んだ。

おじさんが行ってしまうと、大輝殿は膝を抱えてうずくまり、残された私を見下ろした。

（どうしよう、メカねこ）

いきなり廃棄処分されるのは嬉しくない。私は喉に内蔵されたスピーカを震わせ、収録されていた声でにゃあおと鳴いた。三千二百ヘルツの等速再生で。それからわずかに周波数をずらして、また鳴いた。

（仕方ないな）

大輝殿は私の身体を持ち上げると、玄関の中へと招き入れた。重くはないね、と感心した様子の大輝殿は、日本の軽量化技術力をお知りでない。単三と単四の乾電池が入った小皿と、ミルクの入った小皿を持ってくると、どっちが好き？　と床に並べた。私がぺろぺろとミルクを舐めると、メカねこでもミルクが好きなんだね、と満足そうに笑った。

大輝殿が部屋に戻ったのを見届けてから、私はさっと玄関の外へ飛び出し、体内一時貯蔵タンクから排出孔を通して庭の草花へミルクを撒いた。葉っぱからミルクの雫がぽたりと落ちる。草花もたまにはミルクが飲みたい。

そうやって、私は大輝殿の飼い猫として生活をはじめた。もちろん、それには多少の困難が伴った。大輝殿が求めているものを、私はあげることができなかったから。

大輝殿の一日は空気入れからはじまる。朝起きると、ベッド脇に置いた愛用のT字型空気入れを手にとり、寝ぼけまなこをこすりながら、ご家族の空気を入れにかかる。

ベッドに寝ている母上におはようの挨拶をし、きちんと床に立ててから、背中の空気孔のキャップを外し、空気入れの口金を差し込む。折り畳んである空気入れのペダルを広げ、足でしっかり床に固定し、ハンドルをいっぱいに上まで持ち上げてから、よいしょと力をこめて下へ押し込む。

しゅううと小気味の良い音がして、ちょっと弛んでいた母上のお身体がピンと張る。お歳のせいかこの頃ちょっと多めに空気が抜けがちな母上も、空気がいっぱいに入るとふわふわとしたもので、床に底面が着くか着かないかのところで、気持ちよさそうに揺られはじめる。とはいえ以前、空気を入れすぎて父上が破裂してしまったので、ちょっと加減に気を使っている。

全員の空気をいれ終えると、みんなを座卓の周りに着かせ、一緒に朝食をとる。せっせとコーンフレークを口に運ぶ大輝殿のまわりで、みんなはふわふわ浮いている。朝食が済むと、ランドセルを背負い、空気入れを引っつかんで、いってきますと大輝殿は玄関を出ていく。みんなは窓から吹き込む風に吹かれて、思い思いの場所に揺られていくのだ。

大輝殿はその空気入れを、いつも肩に掛けて持ち歩いている。学校や塾の行き帰りに、クラスメイトや近所の人にも空気を入れてあげる。近所の自転車屋にも自動の空気入れ器が置いてあるけれど、あれは一瞬でぱんぱんに膨らんでしまって味気ないのだと、近所の

ご婦人方が道端で語っていて、風に吹かれて流されていった。それに比べて大輝殿は、力加減が絶妙だと評判で、空気入れに関してはちょっとしたものだと、学校でも近所でも人気者なのである。

でも何故であろう。大輝殿はさびしがりやである。もう小学校も五年生だというのに、よくご家族の身体にべったり抱きついている。ぎゅううと懸命に自分の身体を押しつけ、相手の空気を抜いてしまう。大輝殿が抱きついている間は、きゅっきゅっとビニルのこすれる音がやまない。それでも大輝殿は一心に、すがるようにして、相手を抱きしめなさるのだ。

学校でいじめでも受けているのじゃないかしらと母上は悩まれた。何度か話し合いを持とうとするのだが、大輝殿はじっと黙したまま答えない。お母さんが風船なのがいけないの、と言うと、ふるふると哀しそうに首を振るばかり。

（メカねこちゃん、大輝の遊び相手になってあげてね。あの子の寂しさを埋めてあげてちょうだい）

私は母上に仰せつかった。そして、すぐにそれが非常に困難な問題なのだと思い知らされた。

「ねえ、箱座りしてみてよ」

机に頬杖をついて、大輝殿が言った。机の上に乗せられた私を、期待に目を輝かせて見つめている。

箱座りとは、前脚を折りたたんで身体の下に仕舞って座る、猫の伝統的な座り方だ。手を完全に隠した無防備な姿が可愛いと、人間の皆様に評判の姿勢である。もちろん、私はそれをすることができる。

私は前脚の駆動系モータを動かし、第二間接を折り畳んでいった。同時に腹ばいの体勢になるべく、タイミングを合わせて後脚も沈み込ませる。体全体のモーメントバランスを常時監視し、最適化物理演算によって適宜、目標座標を修正する。ういーん。ういーん。モータの駆動音をさせながら、私はその動作を完了させた。

私は箱座りした。

「……」

大輝殿が私を見やる目に、喜びはなかった。

私は自分が何か失敗をしたのかと考えた。完璧に動作したつもりだったが、どこかで演算を間違ったのかもしれない。

検証演算を走らせている私の頭に、大輝殿はそっと手を伸ばした。耳の後ろを撫でさすってくださる。

私は心持ち頭を上げ、ごろごろと喉を鳴らす音を再生した。私の内蔵メモリには、百種類以上のごろごろ音が詰め込まれており、飼い主の好みのごろごろ音を発することができる。ごろごろ。ごろごろ。だが大輝殿はお気に召さない様子で、そっと手を離した。

大輝殿は私を抱えあげると、ぎゅっとしがみつくように頭を伏せて抱きしめた。だがすぐに私を手放すと、部屋の隅に行って膝を抱えてしまわれた。

私はどうしたものだろうかと考えた。

私は人間についての膨大な知識データベースを保有している。ここには人間の感情と行動のパタンと、猫的に適切な応答事例が収録されている。私は大輝殿の行動について、データベースに問い合わせた。該当はなし。次に通信機能を使って、今度はネットワークに問い合わせてみると、興味深い返答があった。

〈人間は不完全なものを可愛いと思う性質がある〉

なるほど、と私は合点し、大輝殿の方へと歩いていった。

にゃあと大きく一声出して、大輝殿を振り向かせてから、コケ、と床に転んでみせた。

膝を抱えていた大輝殿は、ぷっと吹き出した。メカねこのくせに、まぬけだな～と笑って、私を抱き起こしてくださる。さびしそうではなかった。

それから、私はよく転ぶようになった。不完全なものになろうと努めたのだ。

良い転びのために私は精進した。だが、これがなかなか険しい道のりであった。

はじめ、私は転ぼうと判断して演算を走らせ、全身のモーメントを計算し、完璧に転んだ。だがそれではしばらくすると、大輝殿が笑ってくださらなくなった。

不完全さが足りぬからだと私は考えた。私の転びは計算されて完全に不完全なのであり、そのため大輝殿は笑うことができない。

私はより不完全さを追求するため、演算に乱数を混ぜこんで、自分でも意図せずに転ぶようにした。私は完全に不完全ではなく、不完全に不完全でなければならない。無数の演

算が方々で乱れ、その偏りが大きいとき、私はこける。損傷しない程度に閾値を設けることもできたが、より不完全を目指すために除外した。そのため私は、ときたまこけて損傷した。たまには演算ミスが多発し、身体から煙があがってフリーズした。私は不完全な存在となった。これで大輝殿もお笑いになってくださる。

そうはならなかった。大輝殿は私を抱え上げ、どうしたんだよメカねこ、と心配そうに問うた。大輝殿に笑ってほしいのだよ、と私は前脚をもぞもぞと動かし、にゃあおと一声鳴き声を再生した。壊れちゃったのかなあと大輝殿は首を傾げ、だから本物の猫が良かったのにと呟いた。どうやら私はまだ本物の猫の域に達していない。彼らはどれほど見事に転ぶのであろうか。

大輝殿が悲しむため、私は転ぶのを控えざるを得なくなった。しかしまったく転ばないというのもいけない。適度に不完全な、その度合いを考えることにした。どの程度の周期で私が転べば、大輝殿は心配を感じることなくただ笑うことができるのであろう？　それともそんな演算をこなす不完全から遠い私は、大輝殿の興味をひけないのであろうか？

私の思考演算は局所解に落ち込み、ぐるぐると際限なく回り続けた。そこからは試行錯誤であった。様々な乱数や定義式を取り入れ、大輝殿の様子を観測しながら、私は適切な不完全さの研究に努めた。そして試行錯誤の末に、私は不完全定数αを定め、その値を０．００３に設定するのが良いと結論づけた。αが０ならば私の計算は完全であり、数値が高くなるほどに狂っていく。αが低くても高くても、大輝殿は私から興味を失ってしまう。ほどよい数値が、０．００３なのだ。

私はこの発見を母上に伝えようと考えた。母上、母上、０．００３ならば大輝殿は寂しくないはずである。

大輝殿は学校へ出掛けていた。私は大輝殿の部屋のベッドの上で、掛け布団を排熱で暖めていた。

母上、母上、と二階の部屋から階段を降りたところで、私の耳はぴんと立った。聴覚センサが、声を捉えたのだ。

家族のみなが自由に移動できるようにするため、家は昼間は窓を開け放し、空気が自由に通るようにしてある。風が吹かないときはみなが暇だというので、私が前脚でつついて動かしてまわるのだが、なかなかに大変である。

開け放たれた障子の向こうから、やめなさいという母上の声が聞こえた。それから、ぷしゅううと大きな音と、よいしょ、と見知らぬ声。

和室に、歳のころ大輝殿と同じくらいの、一人の少年の姿があった。

赤いキャップを斜めにかぶって、首にやわらかそうな茶斑のマフラーを巻いている。

「やめなさいって言っているのに」

母上の声を、ぷしゅううう！　と空気の抜ける音がかき消す。見ると畳の上には、円筒のシリンダーを黒いプラスチックが覆った空気入れがひとつ据えてある。

シリンダーから伸びたチューブの先が、母上の背中の空気穴に差し込まれている。少年が空気入れのハンドルを押したり引いたりするごとに、母上の空気が抜けていくのである。空気抜きモード搭載の空気入れ。しかもダブルアクションタイプである。

「いやねえ。小皺が目立つようになってきちゃったわ」

ぱんと張っていた母上の身体に、シワが刻まれていく。やがてべこりとおなかがへこんで、上半身がクタンと前に垂れた。それでも空気が抜かれていくと、徐々に小さく萎んでいきなさる。

いやねえ、皺が目立つのよ、と呟く声を最後に、母上の空気は完全に抜き去られ、平らに圧縮されてしまった。

あとでアイロンで綺麗に皺を伸ばしてさしあげよう。考えていると、空気穴から口金を抜き取った少年が、私を見下ろして眉をあげた。

「おまえ、大輝の飼い猫か」

私は応えて少年を見上げ、にゃあおと鳴き声を再生した。

少年はぱちりと目を瞬いて、それから声をあげて笑った。

「なんだよ、メカ猫じゃねえか。本物の猫を飼うこともできないのかよ」

少年の首に巻かれた茶斑のマフラーがもぞもぞと動き、くるりと尻尾を振ってこちらを向いた。二つの目玉が開いて細まり、じいと私を見下ろした。猫である。メカじゃない猫である。もふもふとしている。私は劣等感を感じた。

少年は帽子のつばを斜めにずらし、腕組みをして胸を反らせた。

「メカねこ。大輝に伝えておけ。おまえの空気入れ生活ももう終わりだってな。いや……帰ってきたようだな」

開け放たれた窓の向こうから、アプローチの階段を昇る、とんとんという足音が聞こえてきた。玄関の戸が開く鈴の音がして、ただいまーと大輝殿がおでましになる。
少年を見て、びっくりと目を見開いた。
「おまえが大輝だな。それが、おまえの空気入れか」
棒立ちになった大輝殿に、少年は躊躇なく詰め寄った。大輝殿の前に立ちはだかり、拳一つぶんの身長差でもって見下ろす。靴を履いたままの足を上げ、壁に挟んで大輝殿の動きを封じる。
「おれの名は亮太。隣町の小学校に通ってる。なに、隣町でみんなの空気を入れてまわるいけ好かない奴がいるって噂を聞いてな。どんな奴なのか気になって、今日はちょっと挨拶にきたってわけだ」
「そうなんだ」
大輝殿はぺこりと頭を垂れた。
「わざわざありがとう。お茶も出さずにごめん」
「フン。おかまいなく」

亮太はにやりと不敵な笑みを浮かべると、センセンフコク、と口を動かした。
「おまえにセンセンフコクしに来た。大輝。今日からおれが、みんなの空気を抜いてやる。おまえがいくら空気を入れても、おれが全部抜き取ってまわってやるぜ」
亮太はそう言うと、大輝殿の反応を吟味するような間をあけた。
それから、どうしてそんなことするんだって訊かないのか？　と言った。
大輝殿は困った様子で目をぱちぱちさせている。
「おれの村正とおまえの空気入れじゃ勝負にならない。それを思い知らせてやる」
亮太は誇示するように自分の空気入れを掲げる。彼の空気入れは村正というようだ。では大輝殿の空気入れは正宗とかエクスカリバーとかでいいであろう。
亮太はしばらく大輝殿を見据えていたが、やがてまた不満げに唇を尖らせた。
「どうしてそんなことするんだって訊かないのか？」
「ど、どうしてそんなことするんだー！」
床の上からぺらぺらの母上が言った。母上優しい。
「おれは風船が嫌いだからだ」

亮太は威厳を取り戻すように胸を張ってそう言った。ぴしりと大輝殿に指を突きつけた。
「おまえは風船が好きなのか？」
「ぼくは……」
「おれは風船が嫌いだ。風船が好きなおまえも嫌いだ。メカねこも嫌いだ。みんな嫌いだ。だから空気を抜いてやる。しわしわにして折り畳んで、圧縮して押し入れに仕舞いこんでやるよ」
「だめだよ」
大輝殿はふるふると首を振った。
それから、とても大切なことを伝え聞かせるように言い足した。「そんなのさびしいよ」
「はっ、噂通りの寂しがり屋なんだな。相手がこんな奴じゃ興醒めだぜ。おれはさびしくなんかない。風船を萎ませて折り畳んでやるだけのことで、何処にさびしがる必要がある？
それにおれにはニャー太がいる。絶対に裏切らない、心から信頼できる、ずっと昔からの親友だ。だから風船なんて必要ない」
亮太は、首に巻き付いた猫に向けて、な、ニャー太？　と親愛の目配せをした。

いきなり超至近距離で目配せされて驚いたニャー太が転げるように床に落ちて全速力でどっかへ行ってしまってから数分が経過した。
亮太は涙を拭きながら気を取り直し、胸を張ってもう一度繰り返した。
「何処にさびしがる必要がある？」
「さびしいよ」
心持ちきっぱりと大輝殿が言う。無粋なつっこみをいれずにあげるのは武士の情けであろう。
「黙れ。ともかく、みんなみんな空気を抜いてやるからな。邪魔すんじゃねえぞ！　いやどうしてもってんなら邪魔してもいいけど、なんかいろいろ、思い知んじゃねえぞ！」
亮太は、じゃあな、と窓から飛び出した。空気入れを握りしめ、とんとんと小走りに庭を横切って道へ出て行く。
「追って、メカねこ！」
大輝殿の命令を聞くや、私は飛び出した。ベランダを降り、庭を横切る。道路へ出ると、既に亮太の背中が小さくなっていっている。甘い。私は身体を前傾に構え、空気抵抗を最

小限に抑える四足運動でもって己の加速度を瞬時に限界まで引き上げ、もはやほぼ跳躍というに等しい第一歩を踏み出したところで、０．００３に引っ掛かって盛大にすっ転んだ。

べたーん。

しまった。こんなところで０．００３が発動してしまうとは。

私は立ち上がり周囲を窺った。大輝殿が玄関から飛び出してき、右に左に首をやる。

なんということだ。今の転倒を、大輝殿は見ていらっしゃらなかったのだ。勢い、飛距離、シチュエーション。三拍子揃った非常に良い転倒であったのに。見ていたらきっと笑ってくださったであろうに。

「逃げられちゃった？」

大輝殿は残念そうに私を見下ろした。それで私は亮太を逃がしたことに気づいたが、転倒を大輝殿に見て頂けなかった悔しさに比べれば、些細な問題だった。

「友達になれると思ったのにな」

その声が本当に残念そうだったので、私は首を上げて大輝殿の顔を覗き込んだ。

大輝殿はしゃがみこんで膝を抱え、ちょっと唇を曲げて、亮太の消えた道の向こうに目をやっている。

友達？　でも大輝殿にはもうたくさんお友達がいるじゃないか。ちゃんと空気を入れてあげれば、たくさんのお友達がふわふわしていてくれるじゃないか。

「また会えるよね」

大輝殿は私の頭を撫でながら独りごちた。

私は、大輝殿は今の生活がご満足ではないのだろうかと考えた。

大輝殿も、亮太のように、みんなの空気を抜いて折り畳んで、押し入れの奥に仕舞い込んでしまいたいのだろうか。しっかり圧縮して皺を伸ばせば、何十人もご収納可能なはずである。

そうなの？　大輝殿？　私はにゃあおと鳴いて問うてみるのだが、大輝殿はいつもの空気入れを握り締めたまま、いつまでもぼんやりと道の向こうを見ていた。

＊

それから、大輝殿は学校帰りに町を巡回するようになった。
亮太は宣言通り、町の人たちの空気を抜いていった。歩いていると、すっかり圧縮されて薄型になった人たちが、地面にぺらぺらと散らばっている。彼らの話によると、亮太は神出鬼没に突如現れると、あの強力な空気抜きで空気を吸引し、煎餅のようにぱりぱりになるまで許してくれないらしい。その時間わずかに三十秒だという。
大輝殿はぱりぱりになった人を探して見つけると、懸命に空気を入れてさしあげた。相手の身体の大きさにもよるが、完全に膨らますまで三分から五分はかかる。ダブルアクションとシングルアクションの違いもあろうが、入れるのは抜くより手間がかかる。大輝殿がひとりぶんの空気を入れる間に、亮太は何倍もの数の空気を抜いてしまう。
「追いつかないね」
大輝殿は一渡り空気を入れ終わると、ううんと伸びをしてからため息をついた。
「どうしよう、メカねこ」
私は右脚を上げてみた。
「だめだよ。亮太にミサイル撃っちゃ」

残念である。
「隣町の小学校に通ってるって言ってたよね。行ってみようかなあ」
そんなわけで大輝殿と私は歩いて隣町に向かった。道中、ニャー太が原っぱでシャドウボクシングをして遊んでいたので、一緒に行こうと言うとついてきた。
隣町はもうみんな大体ぺらぺらとしていた。コンビニのひさしの下などに、何十枚もの風船が折り畳んで重ねられ、ぶうぶう文句を言っている。
大輝殿は、重かろうと、一枚一枚ばらして置き直した。ニャー太がそれを引っかきまわしたり、私が丁寧にアイロン掛けしたりした。大輝殿は空気を入れてあげたい様子であったが、さすがにきりがない。
「そろそろ電動空気入れが必要なのかなあ。量をこなさなきゃいけないとなると、手動じゃ駄目だよね。でもなんだか気持ちがこもっていない感じでいやだなあ」
効率と感情のジレンマをテーマに悶々と悩みながら歩く大輝殿だったが、どうやら思考と一緒に身体も道に迷ってしまったようだ。同じ道を何度もまわっている。
歩いていると交番をみつけた。

机の上に畳まれたおまわりさんに小学校までの道を尋ねると、今日の風向きだと行けないと言う。
「ここからだと小学校には、北東の風が吹いているときでないと行けないよ」
風に吹かれてじゃなくて足で行くんだよ、と大輝殿は言ったが、おまわりさんは、よくわからないよと答える。
「それに注意した方がいい。近頃、カラスが出るんだ」
「カラス？」
「町の上空を旋回してる。クチバシで突っついて、空気の入った人たちを破裂させて回ってるらしい。かなり危ないという話だ。あまり出歩かない方がいい」
「そうなんだ。じゃあ、空気、入れない方がいいですか？」
大輝殿が空気入れを掲げると、おまわりさんはそうだねと言う。
「空気が入っていなければ、突っつかれても割れないからね。そういう意味では、あの子に空気を抜かれちゃったのは良かったのかもしれない」
「亮太のこと？」

「知ってるのかい？　ひと月ほど前やってきて、いきなり空気を抜いていっちゃった。こら、逮捕されたいのかって注意したけど、できるもんならしてみろって返されちゃってね、そのまま抜かれちゃったんだ。まあ、できないんだよね逮捕、私。風船だから」
「亮太がご迷惑おかけしました」
大輝殿がぺこりと頭を下げると、おまわりさんは笑う。
「以前は、ときどき空気を入れてくれる優しい子だったんだよ。でも、いつの頃からか、ちょっと扱いの難しい子になっちゃってね。馴染めない子っていうのはいるよね」
話を聞きながらうなずく大輝殿の顔は、どこかさびしげなのである。

交番を出ると、私たちは北東を目指して進んだが、小学校はみつからなかった。ぐるぐると方角も関係なく歩き回り、やっと辿り着いたときには、夕方近くになっていた。
「北東じゃなくて、南西じゃないか。おまわりさん、逆だよ」
大輝殿はぷんぷん怒りながら校門をくぐった。私とニャー太もあとに続いた。
学校は、ぱっと見にはがらんとしていた。だがよく見ると校庭の隅っこ、職員室脇のひ

さしの下に、折り畳まれた風船が何枚も重ねられていた。
校舎に足を踏み入れ、一階から順番に教室を見てまわった。行儀よく並んだ文机の上に、折り畳まれた風船が丁寧に置かれている教室もあれば、黒板脇の床上に、ばらばらになって散らばっている教室もあった。風船たちから聞ける亮太の様子も様々だった。苛立ったような手つきだったとか、淡々と抜いていったとか。
五年二組のクラスメイト達は、みな廊下に出されていた。折り畳まれて壁際に丁寧に重ねられている。教室のドアはぴたりと閉ざされていた。
ドアに嵌め込まれたガラスから大輝殿が中を窺うと、誰もいない教室の中で、亮太が椅子に着席して頬杖をつき、ぼうっと宙を見据えてフリーズしていた。机の脇に村正（＝空気入れ）が立てかけられている。
大輝殿の姿を認めると、途端に活動を再開した。一瞬で目がぱっと輝いた。がたんっと腰を浮かせた。
「遅いじゃねぇか。待ちくたびれたぜ」
亮太は続けた。

「まあ今のは言葉のあやで、全然待ってなんかなかったんだけどな」
「やあ。来たよ」
大輝殿は開いた教室のドアに手をかけたまま、恥ずかしそうに頭を掻いた。
「ニャー太も連れてきたよ」
「ニャー太！」
亮太が口元を綻ばせて腕を伸ばすと、ニャー太は応えるようににゃおんと鳴いて、一目散に亮太のもとへ飛び込んでいった。そして伸ばされた腕をするりとすり抜けて、開いた窓からベランダへ飛び出していった。
ごろりごろりとベランダで転がって遊んでいる。
「きれいな教室だね」
大輝殿は教室に入ると、腕を伸ばしたまま硬直している亮太にお話しかけになる。
亮太は気を取り直した様子で、はん、甘いな、と何が甘いのかよくわからないことを言うと、机の上にひょいと尻を乗せてふんぞりかえり、大輝殿を見下ろした。
「何しにきた、大輝」

「お願いしにきたんだ」
「お願い？」
「みんなの空気、抜かないでよ」
「できない相談だな」
「そうでもないと思うよ」
「そのお願いのために来たのか」
「そうだよ」
「もし俺がいやだと言ったらどうする」
「困る！」
「どれくらい困る」
「すごく困る！」
亮太は足を組んでしげしげと、一文字に口を結んだ大輝殿を眺めた。それからふいと視線を逸らして、ここではないどこかを覗き込む目になった。
「大輝。あのな。俺も以前は、空気を入れてまわってた」

「うん」
「でもいやになった。丈夫な奴は空気を入れてやると、すぐふわふわと風に吹かれていっちまう。ヤワな奴はこまめに空気を入れてやらないとすぐ萎んじまう」
大輝殿はうなだれるように頷いた。「仕方ないよ」
「風の強い日に窓を開けておいたら、父さんはどっかへ行っちゃった。遠くへ行っちゃったみたいで、もうみつからない。母さんの方は穴がいくつか開いちゃって、空気を入れても入れても膨らまなくなった」
「セロテープ貼ってもだめ？」
「試した。だめだった」
「そう」
「俺は、どうして自分だけこんなことしなくちゃいけないんだって思うようになった。なあ大輝、一生懸命空気を入れて何になるっていうんだ。空気なんか抜いて、折り畳んで押し入れに仕舞っておいた方が良かったじゃねえか」
「それじゃかわいそうだよ」

「可哀想なもんか。風船なんか嫌いだ」
「亮太がかわいそうなんだよ。亮太は風船が嫌いじゃないよ。嫌いだったら割ってるはずだよ。割れないから空気を抜くんだ」
「うるさい。勝手に決めつけるな」
「亮太はさびしいんだよ」
「だまれ。なんだよ。そんなこと言いに来たのかよ。おまえと一緒にすんな！」
亮太は苛立たしげに髪をばりばりと掻いた。大輝殿は困ったように立ち尽くして、うつむいてしまった。
私は腹が立つ。せっかくの大輝殿の慰めを、亮太はどうして素直に受信しないのであろうか。受信機能を備えていないのだろうか。
「もういいよ！」亮太が怒鳴る。「用事済んだならどっか行けよ！　もうおまえの町には行かないから！」
亮太が退出を促す。
「いやだ！　ていちょうにおことわりする！」

大輝殿が丁重にお断りする。
「お断りすんな！」
「おとこわりする！」
「帰れよ！」
「いやだ！」
大輝殿、大輝殿、こんな奴は放っておいて私と一緒に空気入れをしようよ。私はとことこと近寄っていって大輝殿を見上げた。
でも大輝殿は既に空気入れをしていた。亮太の顔から目を反らさないまま、口を引き結んで、小さな両手を宙で握りしめている。言い争いながら、握った両手を小さく揺らしている。きっと空気入れをしているのだ。亮太に空気を入れるのかもしれない。
「くそ。わからん奴だな」
亮太が村正（＝空気入れ）を手にとると、ぶんと一振りして威嚇した。取っ手を握りしめて腰だめに構える。
「怪我したくなきゃ帰れ！」

大輝殿がびっくりして目を見開いた。「ぼくの空気、抜くの？」
「違うよバカ。殴るって意味だよ。抜けるなら空気抜いてやるけどな。ないだろ！　空気穴！」
「ないよ！　それにバカって言う方がバカなんだよ！」
「最低だ。むかつくよ。一番欲しいやつに空気穴がない」
「うん。ぼくにも空気穴があったらなあ……」
「空気穴」亮太は意外そうに首をかしげた。「ほしいのか、おまえも」
「ほしいよ。空気穴があったら空気入れられるでしょ。ぼくも風に吹かれて空飛んでみたい。亮太も空気穴ほしい？」
「ほしい」
「亮太も空飛びたいんだ」
首を振った。「空気穴があったら、空気を抜いて折り畳んでしまえるだろ」
「……」
大輝殿は黙した。

亮太は、もういいよ、と吐息をつくと、構えていた空気入れを下ろした。気の抜けた様子で、すとんと椅子に尻を乗せる。
「おまえの好きなようにすればいいよ」
大輝殿はしばらくまごまごとしていた。何を言えばわからない様子で。
それから、自分の空気入れを掲げて、一緒に空気入れしようよ、と言った。

＊

大輝殿と亮太は、廊下でクラスメイトたちに空気を入れている。
教室の中で私は考える。自分に空気穴があったなら、空気を抜いてしまいたい亮太。
それは何故であろう。亮太の家の押し入れは、折り畳まないと入れないくらい狭いのであろうか。かくれんぼ的には死活問題かもしれぬ。
ニャー太よ、そんなに小さな押し入れなのか、と、私は開いた窓からベランダに出る。
陽のよく当たるベランダの上で、ニャー太は寝転がっていた。腹を出し、ごろり、ごろ

りと右になったり左になったり、実にあられもない。私は劣等感を感じる。
私はベランダに背をつけると、ニャー太の隣でごろりと転がってみた。右に左に身体を反転し、完全たる円運動を行ってみせる。モーターがうぃんうぃんと鳴る。
視界にゆらゆらと動くものを捉えた。続いて、素早く動くのがもう一つ。
私は前脚を突き出したまま制止した。目の焦点を調節する。南の空の中空に、何かが空を飛んでいる。
気球である。
その気球に、ひゅうんと突っ込んでいく黒い塊がある。カラスである。両翼を羽ばたかせることなく微動だにさせずにぴんと張り、翼の端から噴射されるジェットの青い炎で空を横切っていく。
メカカラスである。
クチバシを突き出し、ぐるぐると自身の体を回転させながら、一直線に気球に突っ込むメカカラス。パアンと凄い破裂音がして気球が割れた。中から色とりどりの風船たちが飛び出して、ふわふわと空を漂う。

メカカラスは漂う風船たちに狙いを移行すると、ジグザグ運動を開始した。すれ違いざまの一瞬で、ぱん、ぱん、ぱぱんと割っていく。一つの直線動作でいくつもの風船を割ってのける、最適化された無駄のない動きである。それぞれの風船との相対距離と、自身と相手の飛行速度、風速も考慮した良い演算である。
「あ！　カラス」
ベランダに出てきた大輝殿と亮太が、柵に掴まって空を見上げた。
「カー太！」
亮太がカラスを指差して叫んだ。
「あれ、カー太だ！」
ニャー太の次はカー太である。きっと亮太の他のペットは、ワン太とかチュー太とかいうのであろう。ミンミン太とかホーホケキョ太とかもいるかもしれない。
「亮太のカラスなの？」
大輝殿が真っ青な顔をして亮太を見た。
「おまわりさんが言ってた。みんなを割ってまわる酷いカラスがいるって。あのメカカラ

ス、亮太のなの？」
「お、俺のってわけじゃない」亮太は慌ててぶんぶん首を振る。「うちの近くのゴミ捨て場で、よくゴミを啄んでた野良だよ。ゴミ捨てに行ったときにいつもいたから、名前をつけたんだ。おいカー太！」
亮太の声が聞こえたのか、メカカラスは空中でひらりと体勢を変えた。広げられた両翼から噴き出すジェットで身体を支えて宙で静止する。その隙に、逃げ惑っていた風船たちは、空に散り散りになっていく。
「みんなを割っちゃ駄目！」
大輝殿が叫ぶ。メカカラスはしばらく反応がなかった。やがてクチバシをこちらへ向けた。
その身体が、反時計回りに、ぐるりぐるりと回り始める。ドリルのように回転しながら飛来してくる。その直線運動を評価計算すると、メカカラスの針路の軌跡は、六秒ほどのちに大輝殿の胸と交差する。交差すると、衝突面積と速度の関係から、皮膚の破断が予測され……ようするにとても危ない。

「ぼくも割るつもりだ！　風船じゃないのに！」
「教室に入れ大輝！」
亮太が大輝殿の手をとって、教室に駆け込んだ。私も後に続いた。ニャー太はごろんごろんしている。
教室に入り、窓を閉めて鍵をかけてしまうと、メカカラスは宙でぴたっと静止した。校舎の外周をぐるぐると飛びはじめる。嵌め込まれた眼球が、窓からこちらを透かし見ている。割るべき風船がいないかどうか、探している。
「なんなんだよあいつ！　なんでこんな酷いことするんだ！」
大輝殿が憤慨する。
その横で亮太はうつむいている。「……俺のせいなんだ」
私は、メカが動く大元の部分には、人の命令があることを知っている。私が大輝殿を元気づけてさしあげるのは、母上から大輝殿のさびしさを埋めるように承ったからだ。メカカラスが風船を割ってまわっているなら、そうするようにメカカラスに言った人間がいるのだ。

「俺、言ったんだ。もういやだ、みんな割っちゃってくれよって」
絞り出すように亮太が呟いた。
「空気入れんのいやんなって、むしゃくしゃして、ゴミ捨て場にゴミ袋投げこみながら、カー太に向かって言ったんだ。そしたらあいつ、途端にロケット噴射で飛んでっちゃって、パンパンみんなを割るようになった」
大輝殿は神妙に頷いた。「やめるように頼むのはできない？」
「いつも空を飛んでる。音速ジェットだ。声が届かない」
亮太は空気入れを握り締める。
「俺、どうしたらいいかわかんなくて。空気を抜いておけば割ることもできないだろうと思って、町のみんなを萎ませてまわった」
「なんだ、亮太。それでみんなの空気抜いてたんだ。いい奴――」
「違う。風船が嫌いだからだ」言いかけた大輝殿を、亮太は慌てて制した。「俺は極悪非道な男なんだ……」
メカカラスは窓の向こうをぐるぐると旋回しながら、教室の中を窺っている。廊下に漂う大輝殿たちが膨らませた風船を狙っている。もう少しすれば窓を破って侵入するという結論に達するであろう。
「空気抜かなくちゃ。せっかく入れたけど、膨らんでたら割られちゃう」
言って廊下に出ようとする大輝殿の腕を、亮太が掴む。
「待て、大輝。チャンスかもしれない」
「チャンス？」
「ああ。いままでのカー太は、ずっと空の高いところを飛んでいて、声が届かなかった。でも今なら、すぐそこを飛んでる。もう少し近くまで来たら、声が届く」
大輝殿は頷いた。「カー太を誘い込むってことだね？」
「ああ。それで、みんなを割るのをやめるように言うんだ」
どうだろう。それでカー太はやめるだろうか。私は危ぶむ。先程から私はカー太の通信ポートに接続を試みているが、遮断されているのか応答がない。今のカー太は、目的と定めた風船割り行為に最大のパフォーマンスを発揮するため、一切の割り込み命令を拒否している可能性がある。

音声受信性能の問題もある。私は製品データベースの中からカー太の型番を検索した。メカカラスＫＡＡ３３０。体内焼却炉内蔵のゴミ収集モデルで、ジェット制御のために高速演算チップが載っている。単純な処理性能は非常に高いが、愛玩用ではないためＡＩ機構は単純だ。一度目的を理解したら、逐次補正処理をオフしてパフォーマンスを発揮するため、細やかなオートトラブルシュートは期待できない。

内蔵マイクの性能は貧弱だった。これではジェット噴射しているときは余程そばで大声を出さないと、正しく解析できる精度で音声を捉えられない。

「ちゃんと頼めば、わかってくれるよな」

それは甘いのだ、亮太。きっとカー太はわからない。

だって人と人がわかりあえないのに、風船と人もわかりあえないのに、人とメカがわかりあえるはずがない。

「うん、わかってくれる」

私の考えと裏腹に、大輝殿は亮太に頷き返してみせた。

「絶対！」

時折、私は人間を不思議に思う。大輝殿の確信には根拠となる演算がないのだ。

それなのに、どうしてそう力強く自信たっぷりに、言い切ることができるのであろう。

どうして亮太もそれを受けて頷けるのだ。

「亮太、ぼくが窓開ける！」

大輝殿が窓際に立ち、叫んだ。

「カー太が入ってきたら、一緒に、やめるように叫ぶんだよ！」

「おう！」

「準備はいいね？」

「おう！」

大輝殿は窓のラッチに手をかけて、くるりと回して解錠した。

「それ！」

大輝殿が窓をがらりと横へ滑らせた。上空を旋回していたカー太が、ゆっくりとこちらへ首を向けた。

ジェットが噴射。

「せーの！」

『カー太、止』

一際強く噴射した小型ジェット気流の空気振動が、校舎の窓をびりりと震わせた。

二人の唇は「止まれ」と動いたが、私の高性能マイクですら、「まれ」の部分は轟音に掻き消されて音が潰れた。

カー太は大輝殿と亮太の横を、一直線にすり抜ける。

廊下を目指す。

「メカねこっ！」

わかっているよ大輝殿。私は弾道計算を終えると、構えていた右脚ロケットランチャから、小型ミサイルを発射した。

廊下で揺れている先生風船。それに突進していくカー太の軌道を塞ぐように、ミサイルが飛ぶ。

カー太は瞬時に回避演算をこなした。ジェットを一秒の半分の半分の半分だけ切り、速度を落とす。カー太の鼻先を掠めたミサイルが、廊下の天井に突き刺さる。

コンクリートの天井が轟音とともに粉砕された。ぱらぱらと小石大の雨が降りそそいだ。天井にぽっかりと開いた穴から空が見通せる。沈みゆく夕陽の投げかける朱が、極めて風流と言わざるを得ない。

穴から入り込んだ風に吹かれて、風船たちが浮き上がった。私はカー太がどう動くかじっと見据えた。カー太は風船たちを追うことはせずに、じいと私の方を見ている。私を、効率よく風船を割る上での、最大障害と判断したらしい。

その右翼の中ほどから、うぃぃんと何かが生えてきた。細い筒だ。

サブマシンガンの銃身である。酷い武装である。昨今カラスがゴミを漁るには斯様な重武装が必要なのであろうか。

「メカねこ、逃げて！」

「カー太、止まれ！」

止まらず、カー太は掃射を開始した。かたたたたた、と私の前脚の先の廊下に弾丸が食

い込み、細かく破片が跳ねて舞った。
私は後足で廊下を後退しながら、右と左の動きを混ぜて回避を行う。あられもない動きができないのが残念。
「わ、避けてる！」
「すごいよメカねこ！」
すごいのだよ大輝殿。これくらいの芸当はできる。私はメカねこだから、サブマシンガンの弾丸を避けるくらいわけはない。難しいのは大輝殿をさびしくさせないことだ。
私は動き回りながら、途切れなく思考演算を巡らした。カー太の弾道計算は正確で、私の回避運動も捉えている。私の進行方向と速度を細かいフレームで踏まえつつ、それでも確実に私を打ち抜く軌跡を算出し、発射しているのだ。付け入る隙は、射出された後。射出前にカー太が計算した私の動きのパタンと、射出後の回避パタンを変化させることで、カー太の計算を狂わすことができる。
だが徐々に厳しくなっていくのがわかる。カー太が私の回避運動をすべて記憶して弾道計算に組み込み、演算を補正してきている。私もカー太の攻撃パタンを記憶し補正をかけるが、精度で負けている。演算処理性能の違いと言える。このままではそのうち追い詰められる。私は反撃を考える。
ロケットミサイルは使ってしまった。左脚のパンチンググローブしかあるまい。私は弾丸をかわしながらタイミングを窺った。データベース記載のカー太のスペックを考えると頃合だ。一秒。二秒。弾丸の掃射がやんだ。弾切れである。基本的かつ致命的である。
私は後足に力をこめると、廊下を一気に駆け出した。後退し続けたぶんのカー太との距離を、一足飛びにぐぐんと詰める。
カー太よ、なかなかよくやった。演算の速度と正確さは素晴らしい。自慢のジェットも凄かった。サブマシンガンも良い武装。
だがその程度で大輝殿が笑わせられると思うのかっ。
「だめだ！」
「あぶない！」
だだだと廊下を疾駆する私のマイクは、大輝殿たちの叫びをキャッチした。はてなと上を見上げると、カー太の左翼の先端から、太い砲塔がにょきりと生えて、私の方に向けら

れている。
対戦車砲である。酷い武装である。カー太よ、いったい貴様は日頃何と戦っているのだ。
次の瞬間、私の中で、警告イベントが多発した。回避運動の計算処理が、要求時間内に終了せぬという警告の嵐だ。止まるか、右へ跳ぶか、左へ跳ぶか？　止まるなら急激に止まるか、ゆっくり止まるか、あるいはスキップでもするか？　跳ぶならどちらの脚から踏み出すか、何ニュートンで踏み出すか？　左後足関節の角度と右前脚の速度比の調整は？
入射角は？　加速度は？　モーメントは？　今、何問目？
カー太がアホウアホウと鳴き声を再生した。せめてカアカアにしてほしい。そんな思考はできるのに、運動演算はループに陥ったまま、結果が出ることのない現状維持だ。私の身体は止まることも跳ぶこともせずに、一直線に走り続けている。
私は観念した。
最期のときの振る舞い方をデータベースに問い合せると、走馬灯のようだという記述がある。なんでしょうか走馬灯って。
検索を走らせる時間はなかった。カー太が照準を少しもぶらさないまま、対戦車砲の発射命令を起動したのがわかった。
「メカねこ！　しんじゃやだあ！！」
砲弾が射出されるのを、私の高性能カメラアイは捉えた。大輝殿の声は射出音でほとんど潰されたはずだが、私はその波形を聞き取ることができた。さらばだ大輝殿。私はこれから砲弾に突っ込み、怒涛の根性勝負を挑０．００３むのだ。
視界が反転した。
私の右前脚はがくっとバランスを崩した。へたりこむように上体が折れて、床が迫ってくる。すごく迫ってくる。

べたーん。

私はすっ転んだ。
すっ転んだ私の頭上を、砲弾が轟音をまとって通り過ぎた。
教室の壁に穴を穿ち、机と椅子をぐちゃぐちゃに引き倒し、窓ガラスを完膚無きまでに

粉砕すると、勢いを失って校庭へ落ちて行った。
「すごい！　メカねこ、避けたよ！」
うむ。すごいのだよ大輝殿。私は立ち上がりカー太を睨んで四肢を踏ん張った。カー太は宙にぴたりと静止したまま、今何が起こったのかわからない様子で検証演算を走らせている。こけたのだよ、カー太。私はこけたのだ。

――こけると人間は幸せになるのだ！

隙をつき、私はカー太に跳びかかった。左前脚内のスプリングを解き放つと、真っ赤なパンチンググローブが飛び出す。パンチは正確にカー太のテンプルを打った。くるくると錐揉みしながら、カー太の身体が吹っ飛んでいく。が、ジェットを噴射させ、ぴたっと宙で静止した。耐えたのだ。
カー太はこちらに向き直ると、鋭利なクチバシを突き出した。ぐるりぐるりと回転を始め、ジェットを爆発させるタイミングを窺っている。おのれ、もう打つ手がない。ジェットが青い火を噴いた。凄まじい勢いで突進してくるカー太の身体は、さながら一つのミサイルと化す。私は念仏を唱えた。カー太は念仏を唱える私の頭上を通り抜けていき――勢いのまま廊下の奥の壁に激突した。
両の翼と両脚を広げた大の字で、壁に激突してそのまま張り付いている。
なんだ、カー太。なんだそれは。
私は困惑した。
「ぷっ」
と背後で声がした。
振り返ると、教室の入り口から顔を出した大輝殿と亮太が、壁に張り付いたカー太を指差して、まじまじと目を見開いている。二人で顔を見合わせて、どちらからともなく相手をつついた。
「ぶっ」とさらに噴き出すと、すごい、すごい勢いでぶつかった、と、腹を抱えて笑いはじめる。カー太が壁からぺらりと剥がれて床に落ちると、涙を流しながらばしばしと膝を叩きはじめた。

それを見ながら、私は呆然としていた。
そんな馬鹿な。
カー太め、爆笑をとりやがった。私がまだ一度もとっていない爆笑を、大輝殿から引き出しやがった。私のコケのときより、大輝殿はずっと盛大に笑っている。
敗北感に打ちひしがれる私の通信ポートに、リモート通信が入った。
〝０．００３９〟
床にのびたままぴくぴく震えているメカカラスは、その秘密の数値情報だけ、私に伝えてきた。

それから、大輝殿たちは空気入れに精を出した。校内に散らばった風船たちを元通りにすると、町で折り畳まれた人たちを順繰りに膨らませはじめた。
カー太は、衝突の勢いが余程強かったのか、しばらくの間動かなかった。翼がゆらゆらと揺れはするのだが、モータの音が空回りするばかりだ。
亮太は心配し、壊れないでと泣きだした。するとカー太はひょこりと起き上がり、亮太の目の前で軽く踊ると、ジェットの気流を最大噴射し、また壁に激突してべちんと張り付いた。それを二セットほどやった。
笑ってくれなくなったのだが何が悪いのか、というカー太の相談に、まだまだケツが青いと私は答えた。一度爆笑をとれたくらいでいい気にならないでおいてもらいたいものだ。
そんな私は０．００３を新たに０．００３９に更新するかどうか迷い中である。
「なあ大輝、空飛んでみるか」
ある日、二人で空気入れのハンドルを押し下げながら、亮太が言った。そこは川原の原っぱで、私はニャー太と一緒にあられもない姿を晒す特訓をしていた。

「そら?」
「空飛んでみたいって言ってたろ。自分に空気穴があったら」
「うん」
「空気穴がなくても、こんだけ風船がいれば、飛べるんじゃないか。空。行ってみようぜ」
大輝殿はちょっと考えたあと、ぱっと顔を輝かせて頷いた。
みんなに頼んで紐を結わせてもらった。ふわふわと飛んでいきがちな風船を見繕って空気を満タンに膨らませ、紐をつけると、もう一方をプラスチックの取っ手に結ぶ。大輝殿は両手に取っ手を握った。取っ手に結わった色とりどりの風船たちは、すっかり盛り上がった様子で、早く早くと、空気入れする亮太にエールを贈る。
やがて大輝殿の身体はふわふわしはじめた。軽く地面を蹴ると空中に浮かぶ。空気入れ的には入り八割というところ。
ヒートアップした亮太が、次々に風船を括りつける。大輝殿の身体がどんどん地面を離れていく。
「地面蹴れ、大輝!」

亮太の声とともに、大輝殿は右足の爪先で地面を押し込んだ。ふわ、と空中で静止する。
そのとき、風が吹きつけた。
風にのって、くるくると回りながら、大輝殿の身体が空に舞い上がっていく。
「メカねこ!」
私は後脚で地を蹴って、舞い上がる大輝殿の左肩に跳びついた。私を乗せて、大輝殿の身体は、空の一つの点になっていく。眼下に見える亮太とニャー太の姿が、徐々に小さくなっていく。建物が小さくなって、町並みが遠ざかる。風に吹かれて飛んでいく場所は、いったい何処になるのであろう。
そこがさびしさのない場所だといいなあ。